

自由な「個」と共同性の結合を

資本主義が世界の周辺地域へと巨大拡張を遂げる一方で、中核地域ではそれに対する閉塞感が充満している。「地球環境」の危機という難題を考え合わせると、「人類にとって資本主義とは何か」が、二十一世紀の根本問題になるのは必至に見える。

姿勢が必要である。私はマルクス再読の中心に「アソシエーション」を置くべきだと主張している。そういう方向での何人かの先駆的な仕事もあり、基礎研究もなされている。

「各人の自由な展開が万人の自由な展開の条件であるような一つのアソシエーションが出現する」これは「共産党宣言」の有名な結語である。だがアソシエーションは、これ

現代的な課題を解く

アソシエーション論

昨春、第一線

のマルクス研究者約百人の共同作業で『マルクス・カテゴリー事典』（青木書店）が刊行されるなど、内外のマルクス研究も新しい時代に入った。彼の思想は二十世紀に国家イデオロギーと一体化してしまっただからマルクスという原意にいったん回歸しなければならぬ。その上で彼の歴史的境界も見極めつつ、彼を超えて行く

たはた・みのる 一九四二年、大阪生まれ。大阪大学大学院博士課程（哲学・哲学史）修了。富山大学助教授を経て九八年から現職。著書に『マルクスとアソシエーション』、『二世紀入門―現代世界の転換に向かって』（共著）など。

田畑 稔



広島経済大学教授

を実現するために、力や財を結合する形で、「社会を生産する」行為を、またそのように生産された社会を意味する。

労働者教育協会、国際労働者アソシエーションなどが広く実践された。我々はマルクスをこういう文脈で読むというのである。マルクスは未来社会を「諸アソシエーションからなる一社会」として構想した。アソシエーション論の核心は、回復されるべき共同性の質にかかわる。

意外に感じると思うが、マルクスにとって共産主義は「自由な個性」の生成過程である。だから諸個人が全体社会に服属するような共同性への復帰ではありえない。「自由な個性」が共同性と結合しうる社会形態、それがアソシエーション形態なのである。

マルクスにとってアソシエーションは、一面では「権力社会」を対抗的に乗りこえる過程である。資本主義の下では、資本所有により正当化された経営権力が、人々を束ねて社会的生産を組織する。束ねられた人々が危機と闘争の中で自己統治能力を展開して、「自由な生産者たちの連合」に転換していくのである。

資本主義の下では、相互に孤立した諸個人が「物件の共同体」（商品世界）の端末にくっついて、私利の最大化を追求するが、社会的帰結には関心を示さない。こういうあり方を、諸アソシエーション間の「合意」形成による社会の自覚的なコントロールに転換しようとするのである。我々は二十世紀に多くを学んだ。各人の私利追求が自動的に公共善を促すという楽観論は、もはや支持できない。しかし、公権力に一切をゆだねる体制の根本欠陥でもなく、人々が自治的に諸関係をコントロールしようとする「協」の実践を、画期的に強めるほかには道はない。「アソシエーション」に生きることを学ぼう。これが二十一世紀における我々の合言葉になるのではないか。

地域社会や子供社会の再建に不可欠なボランティア・ネットワーク。現在何よりも必要なことは、これら実在するアソシエーション諸運動と結合しつつ、実践的普遍化と思想的深化との同時進行を促すような努力である。